

教育目標:	○自ら学び、よく考える ○進んで協力し、他人を思いやる ○心身ともにたくましく、最後までやりぬく
目指す学校像:	○生徒が主体的に学び活動する学校 ○教職員が協働して教育活動を創造していく学校 ○保護者や地域社会から信頼される学校
目指す児童・生徒像:	○自分の夢に向かって意欲的に学ぶ生徒 ○他人のために労を惜しまない心豊かな生徒 ○強い意志と自信をもち、たくましく生きる生徒
目指す教師像:	○教育に対する熱意と使命感に富む教師 ○一人一人の良さや可能性を引き出せる教師 ○研修意欲に富み互いを高め合う教師

領域	中期目標	短期目標	具体的方策	努力指標 (中間)	努力指標 (最終)	成果指標 (中間)	成果指標 (最終)	分析コメント	改善策
豊かな心と社会性	「豊かな心と社会性を育む。」 ・豊かな情操や規範意識 ・自他の生命の尊重、他者への思いやり ・公共の精神 ・人間関係を築く力 ・困難を乗り越え成長し遂げる力 ・自分のよさや可能性を認識する力 ・多様な人々と協働する力	・生徒の自己肯定感を高め、不登校やいじめ等の課題の解決につなげる。 ・道徳の時間を「自分なりの答え」を見出す時間とし充実を図る。 ・社会的能力(「自己表現力」「自己コントロール力」「状況判断力」「問題解決力」「親和的能力」「思いやり)」を高める。	一人一人の良さを見つけ、褒め、認め、励まし、伸ばす指導(コンプリメント)を推進する。	4 100%		1 68.0%		教員は昨年度の校内研修で、コンプリメントについて理解を深め、意識を高く持ち、コンプリメントを様々な場面でやっている。しかしそれが届いていない、響いていない生徒も存在している。それが自己肯定感の向上につながっていないと考えている。成果指標が「1」となってしまった。令和元年度の全国学力・学習状況調査の3年生の全国平均結果74.1%より低くなっているため、自己肯定感を高めることは大きな課題である。	今後も有効な具体的なコンプリメントの方法等を学校全体で共有する必要がある。生徒にコンプリメントを行うに当たっては、どの取り組みや行動の何が素晴らしいのか、具体的な場面で繰り返し認め褒めることを行っていくことが必要。また生徒アンケートで自己肯定感の低い生徒については意図的に生徒への声掛けやコンプリメントを行っていく必要がある。
			「特別の教科 道徳」は、指導方法を工夫し、「考える道徳」「議論する道徳」を推進する。評価は、生徒の良さを認め意欲につながる評価を行う。	3 85.7%	4 86.2%	「意欲的に取り組めた」「自分なりの答えを見いだすことができた」「自分の意見や考えを発表したり、伝えたりすることができた」とする生徒の割合を平均すると、86.2%と昨年度最終評価の84.9%を上回っている。教員について評価が低くなっているのは、学級担任が初めての教員もいることも一つの要因としてあげられる。	2学期にはローテーション道徳に取り組む予定である。このローテーション授業の間に、教員がお互いの授業を見ることで授業力の向上につなげていく必要がある。また生徒の評価については、これを維持しながら向上につなげていく必要がある。振り返りシートへの教員のコメントは生徒の考えの良さ等を認め記入等をしていく。		
			教育活動の様々な場面で、それぞれの教員の持ち味を活かし、生徒の社会的能力を高める指導を行う。	3 89.3%	4 88.4%	社会的能力が高まったとする生徒は88.4%と昨年度最終評価84.7%を上回る結果となった。これは今年度同じコロナ禍ではあるが、昨年実施できなかった行事や取り組みが、例年とは形は変わったものの実施できたことも大きな要因と考えている。また社会的能力を高めるため、各教員の持ち味を活かした様々な取り組みが教科の授業や学活等の指導で見られた。	授業や学級活動、行事をとおして、それぞれの教員の持ち味を活かし社会的能力の向上を図っていくことを今後も継続して行っていく必要がある。社会的能力を高めることは、学校生活への適応という面にも大いに関わってくるので不登校への未然防止の点からもさらに向上を目指していく必要がある。		
確かな学力	「基礎力、思考力、実践力をバランスよく育み生徒一人一人に確かな学力を育成する。」	基礎的な知識や技能を習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むとともに、学びに向かう力を高める。	ICT機器の活用、1人1台の端末の活用をすすめる、また授業のユニバーサルデザイン化を図り、分かる授業をすすめる。	1 64.3%		4 90.5%		「授業は楽しくわかりやすい」90.5%と昨年度最終評価84.5%を大きく上回ることができた。授業のめあての提示など授業のユニバーサルデザイン化も定着しつつあること、ICT機器を活用した授業の視覚化などもこの数値につながっていると考えている。教員の評価が低い点は、1人1台のタブレットの活用の点で、まだ十分でないと感じていないことが大きく影響していると考えられる。	生徒アンケートの高評価は一定の評価として受け止め、継続して取り組みをすすめていく。1人1台のタブレットの活用については、校内での活用例の共有や他校での事例なども参考に効果的な活用を研究していく。また、GIGAスクール構想初年度であるので、その活用については失敗を恐れずチャレンジしていくことも必要である。
			朝読書、質問教室、補充教室、サポート教室等を実施し励ましや肯定的な声かけ等、個に応じた指導を充実させる。	3 82.1%	4 87.1%	質問教室やサポート教室、長期休業中の学習会等で個に応じた指導はある程度実施できた。基礎的・基本的な知識や技能を身に付けられたとする生徒は87.1%と昨年度最終評価85.6%より高くなっている。励ましや肯定的な声かけの意識は高くなってきている。	今後も質問教室、サポート教室の取り組みを継続していく。サポート教室は、希望の生徒が多く、補助として学生ボランティアの活用も考えていく必要がある。1人1台のタブレットの活用で個に応じた指導をすすめる点では、夏休み期間の学習教室で自主学習の形で進めてきたことをさらに広げていく。		
学校居心地感	「生徒の学校居心地感を高める。」	生徒の心の居場所、生徒同士のきずなづくりの場所のある環境づくりをすすめる。	生徒の困難さに応じて様々な工夫や手立てを講じる。教科の学習、行事、部活等様々な場面で生徒の学校居心地感を高めるアプローチを行う。	4 100%		4 89.3%		生徒の学校居心地感への肯定的な回答は89.3%、昨年度最終評価84.3%を上回った。今年度は昨年度に比べ、行事や部活動が例年のレベルではないが行うことができ、居場所やきずなづくりの場を与えることができたことが居心地感の向上につながったと考えられる。	学校居心地感の低い生徒については、個人面談などを通じて声掛けを行っていく。また自己肯定感とも学校居心地感の関係していることがアンケートでは読み取れるので、自己肯定感の向上も併せて進めていく。
			様々な機会に、生徒に役割をもたせ、生徒に「人の役に立つ力をもっている」ことを自覚させる。	3 89.3%	1 58.3%	多くの生徒は、様々な場面で活躍し、役割を果たしている。しかし生徒アンケートでは、「自分は人の役に立っている」という項目では、58.3%という数値にとどまった。謙虚さの表れでもあるが、この値を高めていく必要があると考えている。また行事等が縮小され、生徒の活動が限られていたことも一つの要因と考えている。	多くの生徒は、自分の役割をもちそれを果たそうとしている。そのことが「人の役に立っている」ことにつながっていることを自覚できていない面もあるので、「ここが、人の役に立つことにつながっている」ということをこまめに伝えていく必要がある。また、様々な形で生徒の活躍を発信していくことも行っていく。		